

(2014年6月)

こころ Vol.19 (平凡社)

特集

創業一〇〇年 平凡社

4 一〇〇人が綴る「私の思い出の一冊」

- 青山南 6 / 浅見雅男 7 / 東浩紀 8 / 荒川洋治 9 / 荒俣宏 10 / 安野光雅 11 / 池澤夏樹 12
- 石井光太 13 / いせひでこ 14 / 一海知義 15 / 井波律子 16 / 伊吹和子 17 / 上野千鶴子 18
- 海野弘 19 / 大澤真幸 20 / 大村彦次郎 21 / 岡崎武志 22 / 岡谷公二 23 / 奥武則 24
- 小熊英二 25 / 落合恵子 26 / 角幡唯介 27 / 梯久美子 28 / 鹿島茂 29 / 柏木博 30
- 片山杜秀 31 / 加藤千洋 32 / 加藤哲郎 33 / 金井美恵子 34 / 金森修 35 / 鎌田巖 36
- 亀井俊介 37 / 川本三郎 38 / 紀田順一郎 39 / 木村榮一 40 / 木村衣有子 41 / 沓掛良彦 42
- 黒川創 43 / 小泉武夫 44 / 小林紀晴 45 / 近藤大介 46 / 近藤富枝 47 / 最相葉月 48 / 佐高信 49
- 佐藤優 50 / 佐野真一 51 / 柴田元幸 52 / 関川夏央 53 / 徐京植 54 / 高橋英夫 55 / 高山文彦 56
- 竹内洋 57 / 武田徹 58 / 武田花 59 / 玉居子精宏 60 / 坪内稔典 61 / 坪内祐三 62
- 津村記久子 63 / 出久根達郎 64 / 榎木伸明 65 / 中島京子 66 / 中島岳志 67 / 中田整一 68
- 中野美代子 69 / 中村桂子 70 / 西木正明 71 / 沼野充義 72 / 野家啓一 73 / 野田正彰 74
- 野見山暁治 75 / 野村進 76 / 芳賀徹 77 / 半藤一利 78 / 半藤末利子 79 / 平尾隆弘 80
- 平川克美 81 / 平田俊子 82 / 平野甲賀 83 / 平松洋子 84 / 富士川義之 85 / 古屋美登里 86
- 保坂和志 87 / 保阪正康 88 / 星野博美 89 / 堀越千秋 90 / 松浦寿輝 91 / 松田行正 92
- 松本健一 93 / 間村俊一 94 / 三浦雅士 95 / 武藤康史 96 / 村田喜代子 97 / 毛利一枝 98
- 森達也 99 / 森まゆみ 100 / 諸田玲子 101 / 柳田邦男 102 / 吉岡忍 103 / 吉田篤弘 104 / 與那覇潤 105

連載小説

136 112 八幡炎炎記—8 村田喜代子
男の子の風景—8—うそつきは何の始まり? 大岡玲

連載

188 172 164 154 150 126 106

カヴァフィス全詩—最終回—訳と注釈の試み 池澤夏樹

三匹の犬と眠る夜—8—Have You Ever Seen the Rain 落合恵子

猫のお化けは怖くない—14—「埠頭」 武田花

漢詩のある風景—半解散人略伝—9 一海知義

あること、ないこと—第十二回—たましひ 吉田篤弘

詩のトポス—その八—嶺南 齋藤希史

188 回想わが昭和史(第二部)—6—ノンフィクションを書くということ、保阪正康

LINE

135 185 記憶のなかの人⑩ 霧のなかのユートピア—五所平之助 野見山暁治

漢字は世につれ—日本語考現学⑤ 形声離れ 笹原宏之

208 212 リレーエッセイ ころろに残る言葉 最果夕ヒ

本 家の記憶を守るということ—松原隆一郎・堀部安嗣

『書庫を建てる—1万冊の本を収める狭小住宅プロジェクト』 永江朗

執筆者紹介 214 / 次号予告 216

表紙カット—串田孫一(臥雲山房印譜)より / デザイン—松田行正+杉本聖士

石毛直道

『ハオチー！ 鉄の胃袋中国漫遊』

加藤千洋（同志社大学教授）

石毛直道さんが中国の食の迷宮に分け入った「ハオチー！ 鉄の胃袋中国漫遊」は、私が新聞社の中国特派員として赴任する準備をしていた時に出合い、とても刺激を受けた一冊である。

特派員たる者、本来ならば最新の中国政治や経済の概説書、あるいは歴史書とか毛沢東ら指導者の伝記などといった書物をトランクに詰めていく、というのが正しい態度だろう。そうしたものも持参はしたが、正直、日々のあわただしい実務にはあまり役立たなかった。日本語の本は、たまに知識不足を補って百科事典などをひもとく程度であった、と告白しよう。

当時、国立民族学博物館の若手研究者だった石毛さんが「何でも食ってやろう」という精神で中国大陸を歩き、そこで切り取った食の風景には、多彩な食材、料理、料理法に加え、暗い文化大革命の時代をやっと乗り越えた中国の民衆の生き生きとした姿が活写されていた。首都

北京のオフィスで、ひたすら指導者の演説や政治の風向きをウォッチすることに汲々としていた身には、それがとても新鮮で、生身の中国を感じさせてくれたのだ。写真が素晴らしかったことも、とても印象に残った。

食いしん坊の私は中国国内を旅する際のガイドブックとしても活用し、食にまつわるコラムを書く際にも随分とヒントをいただいた。たとえば辛い四川料理でも筆頭格の重慶名物の火鍋。これを近刊の自著『辣の道——トウガラシ2500キロの旅』でも取り上げたが、唐辛子で真っ赤に染まったスープを、石毛さんが「まるで血の池地獄のよう」と形容した、と紹介した。

ところが今回、久しぶりに「ハオチー！ 鉄の胃袋中国漫遊」を再読したら、そうした形容は見当たらない。路地裏で鍋をつついた石毛さんは「なにやら恐ろしいげなおどろどろしいものだ」と書いていた。「血の池地獄」は石毛さんの別の本か、講演の機会に目にし、耳にしたものだったかもしれない。思い込みを猛省します。

（一九八四年刊、のち平凡社ライブラリーとして『鉄の胃袋中国漫遊』と改題して一九九六年刊）

石堂清倫

『20世紀の意味』

加藤哲郎（政治学、現代史）

この本は、著者九十七歳の作品である。著者石堂清倫は、二〇〇一年九月、本書刊行二か月後に永眠した。文字通りの遺書であり、二十世紀への鎮魂歌となった。先だつた親友、作家中野重治に学んで、円熟した思考から絞り出した、考え抜かれた言葉がちりばめられている。没後には、石堂・中野の周辺から育った澤地久枝の「中野さん・石堂さんとわたし」を収めた「わが友中野重治」も、平凡社から刊行された。私も、著者への謝辞と哀悼を添えて、「20世紀を超えて——再審される社会主義」という書物を返歌とした（花伝社、二〇〇一年）。

共産主義者として自ら体験した「転向」を、中野重治が生涯背負った「裏切り」「降伏の恥」とみなすのではなく、それ自身が権力との思想戦・宣伝戦の産物であり、どのような有効な抵抗がありえたのか、と考える。獄中の「非転向」と、出獄しての政治復帰を促す中国共産党の「反共啓事」登録を対比し、「転向・非転向」とス

ターリン崇拜が踏み絵となった戦後日本社会主義の不幸な出発を検証する。この「転向」再論」は、中野重治を救済する論理とただただけではなく、その後の学術的「転向」研究の出発点となった。

革命家石堂にとつての二十世紀は、「転換を果たせなかつた世紀」であった。果たすべき転換とは、当初はロシア型共産主義革命であったが、やがて「短期決戦的な行動によってつくられる制度」は「生活の中から生まれてくるものと性格が違う」ことに気づく。晩年のレーニンから「機動戦」の限界を学び、グラムシに先駆的に注目して「機動戦から陣地戦への移行」を確認し、ガンジの「おだやかな暴力」への抵抗と「永続革命から市民的ヘゲモニーへ」の思想に達する。

私はこれに学んで、二十一世紀を「非暴力・寛容・自己統治の政治」「陣地戦から情報戦への時代」と捉えた。近著の平凡社新書『ブルゲ事件——覆された神話』はそのケース・スタディであるが、最期に病院でお会いた時に頼まれた、満州事変時の情報戦の研究は、まだ果たせずにいる。

（二〇〇一年刊）